

## 第5回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<中学の部 優秀賞>

走りきった僕らの冬

片山諒哉

しんどい、もう止めたいと思った。中学二年の冬の駅伝。僕は補欠に選ばれた。部内でも体力が無いほうだったので、練習はキツくついていくのに精一杯で、なかなか縮まらないタイムと痛くてたまらない脚に音をあげてしまいそうだった。

それでも必死に頑張れたのは、日に日に自分が成長していることが、自分自身分かったからだ。ここで負けたら僕は大人になってもなにも出来ない人間になってしまう。それではダメだ。正メンバーになれなくても僕は僕自身に勝ちたい、そう強く思って練習に励んだ。仲間が一人、退部した。駅伝の正メンバーに選ばれた1つしたの後輩だった。僕はすぐに顧問の先生の元へ行き自分の気持ちを伝えた。

「走らせて下さい。」補欠の僕は正メンバーとして、どうしても走りたかったのだ。一緒に頑張ってきた仲間と1つのタスキを繋ぎたい。そして何より、走るのが好きだから。先生は「頑張れ。」と言ってくれた。これまでの努力が認められた気がして嬉しかった。

駅伝当日、メンバーが一人、また一人と走っていく。僕は緊張でじっとできなくてソワソワしていた。すると、それに気付いてくれた仲間が「自身もって、全力出しきろうな。」と言ってくれた。自信が沸いてきた。

いよいよ自分の番がきて、みんなの想いのつまったタスキを肩に掛け、足を踏み出した。応援してくれている仲間を想うと疲れを忘れる。懸命に走った。そして、アンカーにタスキをつないで「ファイトー!!」心から言った。

結果は予想よりもはるかに良い順位だった。一位にはなれなかったけれど、僕達は達成感で一杯だった。みんなのために頑張る。自分のために頑張る。つないでくれる人がいるから頑張れる。走る先に仲間がいるからこそ頑張れた駅伝大会だった。